

川上宏奨学金研究成果報告書

令和2年3月17日

研究科題名：市民映画祭ボランティアによる地域活性化への寄与
～しんゆり映画祭を事例に～

キーワード：映画祭、ボランティア活動、新百合ヶ丘、地域活性化

研究者名：成城大学文芸学部マスコミュニケーション学科3年

1. 研究開始当初の背景

2019年のわずか1年だけに着目しても、日本ではいまだに100件を超える映画祭が開催されており、映画祭研究も活発に行われてきた。しかし、既存の研究では映画祭の主催者側は運営に携わる時点で地域活性化に寄与しているという前提がなされており、運営側の持つ地域活性化への意識や行動があえて考察されることなかった。だが、主催者側の人間が皆等しく当初から地域に関心・関与を持つわけではない。とくに市民ボランティアは映画祭の運営に参加する中で、地域との関わりを認識し、行動を変えていくのではないかと考え、しんゆり映画祭を事例に調査を実施するに至った。

2. 研究目的

しんゆり映画祭の市民ボランティアには、川崎市新百合ヶ丘に在住している人はもちろん、市外から参加している人もおり、年齢や性別、参加目的も異なる。これら市民ボランティアは映画祭の運営に参加する中で、新百合ヶ丘という地域との関わりを認識し、行動を変えていくことが、筆者の予備的な参与観察から判明したことだった。

そこで、ボランティアスタッフの映画祭への関与を通じたまちに対する外面と内面の変化を実地調査で明らかにすることによって、主催側に市民を起用することの意義を改めて地域活性化の側面から捉え直す。地域活性化とは何をすることなのか、それを理論先導ではなく、市民ボランティアの実際の活動を通して考察していく。

3. 研究方法

本研究では、半構造化インタビューの実施と参与観察を中心とした質的な調査方法を採用する。筆者が2019年5月から12月末までの約7か月間、市民ボランティアスタッフとして活動する。プレス班とSNS班に所属し、報道関係者へ向けた広報活動とInstagramでの情報発信を主に担当し、開催準備と興行にも携わる。そのうえで、同映画祭の市民ボランティア3名にインタビューを実施する。それらを3つの分析点から比較検討し、地域活性化を目的としたイベントに運営側として関わるのが市民ボランティアにもたらす、

まちの利用度や意識の変化について検討する。

4. 研究の成果

映画祭活動に参加する以前から新百合ヶ丘を利用していた場合、まちの利用度の変化はあまりなかった。一方、意識面での変化は大きく、まちを盛り上げたいという意識の強さで他のイベントに参加するといった今後の行動に変化が見込まれる。

別の事例では、14年間にもおよぶ映画祭の活動をきっかけに、食品や日用品などの日常的な購買活動を新百合ヶ丘でするようになっていた。銀行やスポーツセンターも新百合ヶ丘の店舗を利用し、生活の拠点となり、行動面での大きな変化が見られた。

市外に住み、ボランティア歴が1年目の場合、まちの利用度はほとんど変わらなかった。しかし、映画祭の活動を通して新百合ヶ丘に親近感がわき、映画祭以外の目的でも来てみたいと思うようになっていた。行動と意識の両面において、他の調査対象者より変化はわずかであったが、遠くに住んでいて地名だけしか知らなかった状態から、ボランティア活動のために新百合ヶ丘を訪れたり、親近感を感じるようになったのは貴重な変化である。

以上のことから映画祭の活動年数や映画祭活動を始める前後のまちとの関係性によって変化の大きさは異なるが、少なくともいずれの事例も行動ないし意識の変化が生じている。このことから、しんゆり映画祭の運営にボランティアとして関わることは、新百合ヶ丘の地域活性化に繋がると考えられる。

5. 研究費用内訳

ボランティア活動費(交通費を含む)
物品費
謝礼
その他